

---

# シンデレラではありません！

庶民A

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シンデレラではありません！

### 【Nコード】

N1426Z

### 【作者名】

庶民A

### 【あらすじ】

童話なんて、童話なんて・・・当事者になったらきつと面倒なだけなんだから！

とある令嬢の運命が変わったかもしれない日のお話。

王子様を目の前にして逃げ出したいと思うのは、私か犯罪者くらいではないだろうか。

本当、何でこんなことになったんだろう。

現実逃避のために巡らせた思考は丁度五日前の出来事から回想を始めた。

その日は朝から忙しい日だった。

王家の使者が義父であるメリディア公爵ではなく私を訪ねてくるというのだ。

昨日催された舞踏会で何かあったと義母様に聞いたけれど、生憎風邪が治りきっていないかった私は参加していないから知らない。

なのに今朝、いきなり先触れが来て「王様の代わりに宰相が私に用事があつて会いに来る」という内容を長つたらしい前口上と一緒に回りくどい言葉を使って伝えてきた。

おかげで我が家は上へ下への大騒ぎ。

当事者にさせられた私も、やれ失礼の無い服装だ髪型だのと結構長い時間直属のメイド達に着せ替え人形にされた。

正直、面倒。

失礼の無い程度に適当でいいんじゃないかと思う。

宰相様だつて着飾る時間も手間も無いことくらい考慮して見逃してくれるんじゃないだろうか？

義母様にそう言ったら「時間の無いときこそ最上の装いをするものだ」と怒られた。

もてなしの心を持って、ということらしい。  
そんな訳で、これから舞踏会にでも行くのかという位しつかり着飾らされて宰相様に対面した。

「お初にお目にかかります、宰相閣下様。メリディア公爵が養女むすめフローラ＝メリディアにございます」

挨拶ってこんな感じで良かったっけ？と思いながら適当に考えた口上だったけど、宰相様は目を細めて満足そうに頷いたからこれだよかったんだろう。

許可されて顔を上げると、40代とはとてもじゃないけど思えない綺麗な顔。

疲労感たつぷりの憂い顔だけど、そういうところも「影がある」と言われてマイナスにはならなさそう。

「来て早々申し訳ないのだが、本題に入らせてもらってもよろしいか？」

「ご随意に」

では、と宰相様が持ってこさせたのは、片方だけのガラスの靴だった。

かなり小さい。足の小さい自覚がある私でもぎりぎり履けるか、というくらいだ。

まさかシンデレラの童話みたいに「舞踏会に来た見知らぬ姫シンデレラが忘れて帰りました」なんてことは……

「この靴は、昨日催された舞踏会で王子と踊られた令嬢が忘れて行かれたもので、私はこの靴の持ち主を探すために各家を回っているのです」

はい、大正解！。  
当たった所で何の嬉しさも無いけど。

「まあ。御伽噺のようなことが本当にあったのですね」

「そうなのです。申し訳ないのですが、王より爵位をお持ちの方のご令嬢には皆試し履きをさせるようにと仰せつかっております。別室にてお試しく下さい」

心底申し訳無さそうに言う宰相様。

ここで断るのは義父様に迷惑がかかるかもしれないし、とりあえず別室で試させてもらうことにした、ら。

「まあ・・・ぴったりですわね、お嬢様」

「本当に。まるでお嬢様のためにあつらえたような」

「・・・そうね」

私は昨日風邪という大義名分を掲げて部屋でぐうて・・・静養してたからその見知らぬ姫シンデレラではないけど。

ともかくも「一応足は入った」という事実を伝えてもらうと、宰相様は私を王城に連れて行くわけでもなく普通に帰っていった。

それから五日。

何の音沙汰も無かったからガラスの靴のことなんてすっかり忘れた今日、急に王城に来るようにと義父様経由で呼び出された。

案内された部屋には私を含め貴族のご令嬢らしき人が8人。

最初は何事かと思っただけけど、部屋の隅に立つ使用人が持っているガラスの靴が目に入って理解した。

ああ、私以外にも靴が履ける人がいたのか、と。

それからまた二人増えて、貴族令嬢は全部で10人。

いつまで待たせるんだろう、と思っているとノックが鳴り使用人らしき人が告げる。

「リヒャルト＝アルデイルナ＝シエンタル王太子殿下がおいでになられます」

その声を合図に、思い思いにくつろいでいた私達は立ち上がり礼をする。

なんとなく人が来たのがわかる。足音が微かにしかしなからすごく分かりづらい。

「顔を上げてください」

宰相様の声で私達は礼を止める。

部屋で一番豪華そうな椅子には金髪碧眼の青年、リヒャルト王子が座っている。

へえ、この人が。と違って不躰でない程度に、あくまで自然に王子を観察する。

ふと、目が合う。

逸らしたら負けだと思って一拍じっくり観察した後、結局目礼をする。

視線を元に戻したらもう王子の視線は私のほうにはなかった。

それにしても、こんななんとも思っていないだろう女の子達に微笑み続けて疲れないんだろうか。

「王子、あまりお時間が」

「わかっている」

宰相様にそう笑いかけて立ち上がり、歩いた先にいたのはこの国で

一番可憐だと噂されている某伯爵令嬢の前。

「ご足労頂きありがとうございます。また次回の舞踏会にてお話いたしましょう」

そう言って手にキスをする。

隣の伯爵令嬢にも、また隣の子爵令嬢にも同様に。

そして、私の前　　を素通りして男爵令嬢、侯爵令嬢と続けてゆく。

挨拶されなかった私は、他の皆さんからあからさまな嘲りとか侮蔑とかいった視線を貰った。

べ、べつに悔しくなんかないもんね！むしろなんで私を放置するんだってという怒りのほうが強いもんね！

くっ・・・こうなったら意地でも冷静でいてやる・・・。

私以外のご令嬢方に挨拶し終えた王子が宰相になにやら目配せすると、私は使用人の一人について別室に行くように言われた。

・・・私、何か失礼なことでもしたっけ？

王子をじろじろ見てたのが悪かったのかな？でもばれないようにしてたし・・・。

案内された先で結局どういふことなのかと考えていると、ノックの音が響いた。

入ってきたのはさつきと同じくリヒャルト王子と宰相様。

顔を上げよと言われてなおると、目の前に来た王子が私の手を取りひざまづいた。

・・・ひざまづいた？

「フローラ殿  
えませんか？」

私のために私の妻シンデレラになってもら

拝啓、天国にいらっしやるでしょうお父様お母様。

お二人の娘であるフローラは、なぜか当事者でもないのに御伽噺の舞台にあげられてしまうようです。

(後書き)

キャラ構想は練れるものの庶民Aはこういう上流階級のこととは書けるほど詳しくないのできつとこれは中世上流階級「もどき」を舞台にしたものかと。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1426z/>

---

シンデレラではありません！

2011年12月5日00時53分発行